

特集

まぐわい

「目合」^{めあひ}。見つめ合って愛情を知らせること、男女の交り
を意味する。精神の交信を経て、はじめて肉体の交接が果た
されることを匂わす、こんな気の利いた言葉が、日本語には
あるのである。

男女が求め合う気持ちは、文化を産み出す原動力になっ
てきた。が同時に、野生の性は、社会の秩序を乱すタブーと
され、文化と時代の規制を受けてきた。

出会いと契りの神秘は、いつたいどこへ行ってしまっ
てしまう。



成人男女が踏み合うさまざまな姿をあらわしている。
いずれも真鍮製品で、重さはそれぞれ50～350グラム
鑄像(性教育教材)
西アフリカ(ナイジェリアおよびコートジボアール)
標本番号(右上より) H31359 H31353 H31360
H31366 H31365 H31354

頭のなかの 尾てい骨

近藤 雅樹

(こんどう まさき)

本館民族文化研究部

規制を受ける性

動物は、成熟するとオスの方が美しく見
栄えよくなるようだ。孔雀を見るたびにそ
う思う。そういえば、ひところ「ピーコッ
ク革命」という流行現象があった。一九六
〇年代後半のことだった。ひよつとすると
男のこたちはあのころから先祖がえりし
始めたのかも。

貧相なオスはメスを惹きつけることが
できない。それはヒトも同じだ。だから、
黄金色にかがやくたてがみをもつオスの
ライオンに「百獣の王」という立派な称号
を与えたのだ。でも、たてがみのないメス
のライオンを「百獣の女王」とはよばな
かつたし、今もいわない。フェミニストたち
も、動物に対するセクハラ行為にまでは気
がまわらずにいる。

ヒトの求愛と性行為は、双方が合意すれ
ば、誰ごも、いかようにでもおこなえると
思われそうだが、じつは違ふ。それぞれが属

発情か、愛情か

人間も、もとはといえば野生の存在だっ
たから、ほかの動物と同様に発情期があっ
た。女性の月経は年に一度だった。繁殖にも
つとも適した季節に排卵していたからだ。と
いう文章を、何かの本で読んだことがある。
何を根拠にそういえるのかと思いつつも、
もつともらしいことをいうと感心した。そ
して思い出した。そういえば、日本語には「木
の芽立ち」ということばがあった……。

これは、春に木々が芽吹き始める時期を
あらわすことばである。しかし、その時期に
なると、陽気のせいなのか、サカリがついたよ
うにおかしな行動をおこす輩があらわれが
ちだった。そのことを婉曲に表現するため
にも使われていたのである。今は木の芽立
ちやさかいなあことばやいては、娘や姪の身
を案じたのである。

季節を問わず、四六時中出会い系サイト

の交信が盛んな昨今、このことばは死語に
なりつつあるようだ。でも「広辞苑」には載
っている。比喩的用法には触れていないが、
現代日本語のもつとも権威ある辞書に載っ
ている。それは、高度に発達した現代文明を
謳歌しているわたしたちの体内に、神経系
の中枢部に、野生の痕跡が残存しているこ
との証である。尻尾は消滅しても、まだ尾
てい骨が残っているのと同じことだ。つま
り「広辞苑」を読むことは、医学書の胎児骨
格標本の図解を見ることに通じているのだ。

人間—類人猿というべきか—も、ほかの
動物と同じように自然界の法則にしたがっ
て生存していたのだという主張はわかりや
すい。なるほどと思う。類人猿とはくらべよ
うもないほど進化をとげていた北京原人も、
ネアンデルタール人も、モグラやネズミと
同じように、たしかに洞窟をすみかにして
いた。クロマニヨン人もそうだった。

そんな時代に、夜こそセックスを楽しむ
余裕があったと思うのかねと問われれば、
これも「まあ、たしかになあ」と、納得させら
れそうなお話だ。



からくりタバコ入れ(個人蔵)
船場某家の御寮人が要用していた
招福繁盛の縁起物



求愛するオスの孔雀

耳から心に染み込んで...

佐伯 順子

(ささえじゆんこ)

同志社大学教授



音の官能

国産み神話のカップル、イザナミとイザナギは「あなにやしえを」と「あなにやしえをとめを」と互いをよび合った後に交わり、イザナミは国を産んだという。太古の「まぐわひ」は神々の尊い営みとして語り伝えられている。

古代の求愛は、容姿を見ての判断よりも、まずは相手をよぶ声、あるいは歌によっておこなわれた。目よりも、耳の世界である。対象との距離がある視覚よりも、身体の内に入り込む聴覚のほうが、より全体的であり、官能的である(M. デュフレンヌ「眼と耳」といわれるゆえんである)。「万葉集」に残される歌垣の風習も、歌をうたい合つての求愛であり、古代の遊女たちもまた、姿形ではな

く、まずは優れた歌声で客を誘ったのである。

耳に訴える求愛は、近代文学にも随所に残されている。「二葉亭四迷『平凡』明治四〇年」の主人公、古谷は、三味線の音に合わせたお糸さんという女性の声にはれ込み、「お糸さんの声」が「私の耳から心に染込んで...全存在をゆるがされる」と手放しの賞辞を送り、彼女を「巫女(シシヤマン)」とまであがめるようになる。夏目漱石「こころ」(大正三年)の先生も、下宿のお嬢さんのへたくそ(?!)な琴の音に心をかき乱されるのであった。

だが、女性からの求愛は、文学のなかではしばしば悲劇に終わる。「平凡」のお糸さんは、自分に気があると見てとつた古谷に芝居見物をねたり、その夜に男の部屋を訪れて関係を結ぶ。まるで女性からしかけた夜這いのようにである。だが、彼女が玄人あがりを想像させる身もちの悪い女性であることと察した古谷は、自分から手切れ金を出して身を引いてしまふ。一方、「こころ」のお静さんは、先生と結婚したものの、夫に自殺され、一人となり残される。「見清純派のヒロインであったも、男性から見ると、異性を挑発するかのような行動は、処罰される。男性中心の社会は、求愛の主導権も男性に

求愛のむくい

あるべきと主張する。イザナミ、イザナギの神話でも、女性が先に相手をよんだことがよくないとされ、男性を先にやり直したところ、無事に国が生まれた。求愛はまず男性から、という規範は、すでに「古事記」の時代から存在していた。

「おい、木村さん信さん、寄つておいでよ」女性から男性へのよびかけて始まる、樋口一葉「こりえ」(明治二八年)のヒロイン、お力が、非業の死を遂げるのも、その意味で象徴的であろう。お力もまた、「わが恋は細谷川の丸木橋」と、座敷で切ない歌声を響かせる女であった。今も中国の一部地方に残る歌垣の風習は、開放的でおおらかな印象がするけれども、文学のなかの女性の求愛の歌声と、その果てにある契りとは、はかなく哀しい。



ハヌノオ・マンヤンの若者たちは、このバイオリンを弾いてプロポーズする
フィリピンのバイオリンと弓
(標本番号H63392)

特集 まぐわう

マレーの人たちが使っていたものと推定されている。真鍮製マレーシアの化粧用具入れ容器
(標本番号H5862)



宝石で飾られた銀製品
イランの眉すみぬり
(標本番号H10421)



めぢから

一目は口よりもモノをいう一

水口 千里

(みずぐち ちさと)

神戸深江生活文化史料館研究員



電車内で化粧をする女性

出陣儀礼

朝の女性専用車両は、テレビタレントの出番待ちの楽屋かと思うときがある。彼女たちが長い時間、真剣に取り組んでいるのはアイメイクである。アイラインやアイシャドウで縁取りやグラデーションを施し、ビューラーで癖つけた睫毛を、マスカラでこれでもかというほど長く濃く増殖させていく。完成した目は、もはや原型をとどめていない。そう、彼女たちは「目力」を手に入れたのだ。

「恋を呼ぶ目力」「目力養成セミナー」(即効目力UP技「単色グラデーション」技でセクシー目力UP「モテ目確定! アイメイクコスメ」:若い女性向けの雑誌「non-no」六月五日号)に、こんなキャッチコピーが散りばめられた特集が組まれていた。紹介されたのは、「目力」のある瞳を創るためのさまざまな化粧用具の使用、造作の欠点の補正の仕方、好みのイメージを演出する技などの化粧テクニクである。

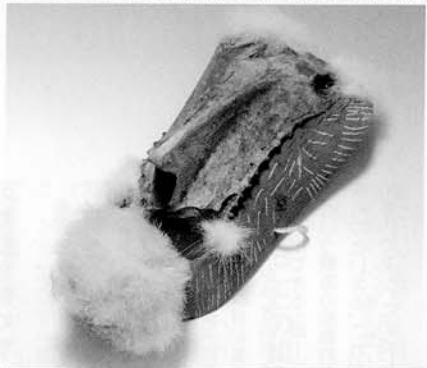
交信の行方

古くから化粧は、多くの役割を果たしてきた。身分や階級の証し、呪術宗教的な変身の手段、たしなみななどである。美しく装うための化粧もそのひとつであった。化粧によって追求される美とは、極限すれば、異性として認識される女性らしさである。もともと平坦な顔の日本人が、女性らしい色香を表現しやすいパーツは唇であった。「紅をさす」ということばは、本来もっている意味以上の何かを感じるの

は文化的背景があるからである。しかし、西欧化の波は化粧方法にも影響を与え、一九七六年「揺れるまなざし」をテーマにした化粧品会社のキャンペーンを契機に、アイメイクは一般女性のあいだに広まった。その後もアイメイクが特化され続けているのは、化粧品会社やマスコミの戦略によるだけでなく、目が顔の印象をもっとも決定づけるパーツだからなのだろう。合コンに行くとき、メイクももっとも気合を入れるのが目であるという統計結果もそれを裏づけている。

合コンで相手の男性から携帯電話の番号やメールアドレスを尋ねられる。それは求愛の一種である。女性は、合コンに限らず日常生活においても、より多くの、そしてより好ましい男性から求愛されることを望んでいる。一見、男性からの働きかけを待つ受身の行動に見えるが、それは違う。男性が求愛したくなるような美しい女性になるための努力を費やし、ときには演出もする。そしてひとたび意中の相手を選べれば、万感の思いを込めて見つめる。向けられた視線を受け止めることは、交信である。一方が目をさらせば、交信は成り立たない。「目力」があるとは、目を離せなくなるほど魅惑的なまなざしをもつことなのだ。「目合」に、交信、性交だけでなく目を見合わせて愛情を知らせるといふ意味があるのも、偶然ではない。

合コンで出会った男性から、後日連絡が入る。求愛の成就の第一歩だ。それに応える価値があるかどうかを見極めるのは、メイク・マジックの及ばない本当の意味の「目力」である。



森の民のクマとの絆

佐々木 史郎
(ささき しろう)

本館研究戦略センター

シベリアや北米の森林地帯ではクマに対する崇拜、信仰が共通に見られる。これらの地域ではクマが捕れると村を挙げての盛大なお祭りをする。逆にお祭りをするためにわざわざ冬眠中のクマを捕つてくることも多い。北海道のアイヌやサハリン、アムールのニヴフは仔グマを家で飼育して、ある程度大きくなつたところで、祭りを開いてクマを殺し、靈魂を送つてその肉を食べる。アイヌではイオマンテ(熊送り儀礼)とよばれる。ロシアで長年シベリアの森の狩人たちの世界観を研究してきたセルゲイ・ペレスニツキー博士によれば、彼らのなかには、雌グマが捕れるとすぐにその場で捕れたクマとセックスする人びとがいるという。それはこの神聖な動物との絆をより強めるためであるといわれる。また、森の狩人たちはクマのセックスが人

ときわめてよく似ていることを知っている。そして逆にクマがすることは神聖な行為であることから、人びともそのまねをしようとする。つまりクマのセックスの体位は人間にとっても神聖な形なのである。
そういえば、北方の森の民のあいだにはいわゆる黙婚譚とよばれる民話のジャンルが広まっている。その多くは雄グマが人間の女性をさらう、または人間の女性の方がクマの雄を選んて結婚することによって、子どもが生まれるという話である。その結末は、子どもが超自然的な力をもつていて一族を繁栄させるというものから、夫のクマもその子どもも人間の猟師によって殺されてしまう悲劇的なものまであるが、おそらくそのクマは人間と全く同じように夫婦生活を送っていたはずである。

グシイ流 正統派

松園 万亀雄
(まつその まきお)

本館館長



グシイの石彫(個人蔵)

西ケニアのグシイ人には、正統とされる夫婦の性交の仕方がある。一般的な性交体位は対面側位と男性上位の二種である。なかでも対面側位は、これこそ正統的でもっとも普遍的な体位として語られる。結婚したところ、男は側位と上位の両方を用いるが、子どもが生まれて結婚生活が落ち着いてくると側位一本槍になるようだ。
(二女が)脚を上げる」というのはセックスを意味するグシイ流の表現だ。この場合の脚は単数、つまり片脚であり、男が女の両脚のあいだに下半身を入れ、側位を示している。この側位はまた、「夫の腕」(右腕のこと)ともよばれる。「夫の腕」とは、男が右腕で女の首を抱きかかえた姿勢で性交することを意味する。左腕は「妻の腕」ともよばれ、弱い、優しい、恥ずかしがる腕とされる。なお、

グシイ語の腕(オコボコ)は腕の付け根から指先までの全体を指す。
以上、まとめていえば、男が体の右側を寝床につけて、右腕をすべり込ませて女を抱き、左手で愛撫するというのが、グシイ夫婦の正統的なセックス体位である。この性交体位は、男女が埋葬されるときの姿勢と同じである。こうした男女に対応する右、左の区分は、屋内屋外の空間利用や家屋の左右にとりつけたドアの使い方にも密接に関係している。アフリカでは、側位の性交体位が意外に多いようだ。
しかし、こうした正統的な体位も、近年、若夫婦のあいだでは多様な体位のうちの一ひつつになりつつある。



おやめなさい、そんな歌

齊藤 純
(さいとう じゅん)

天理大学教授

今から三五年ほど前、京都市の小学生だったわたしは、学校で友人たちとこんな歌を歌っていた(キラキラ星)または「ABCの歌」の節で。
「ABC D しゅじゅつて、カニにチンポを挟まれた。痛いじゃないか放さんか。放すもかむけチンポ」
級友に教わった昔歌で、別に「ABC D 豚のケツ」と連呼するタイプもあった。試みにインターネットの検索を使い、万二だのなんだで調べると、ほぼ同じ歌詞の報告が見つかる。相応に流布していた歌らしい。なぜこんな歌を喜んだのか。子どもの気持ちは説明しにくい。今思う「性」という、大人が公言を憚る事柄を、実態は知らないが口にする。いけない事であるのは察せられ、そのスリルが楽しくてゲラゲラ笑っていたように思っ。民俗学を学んで驚いたのは、同じよう

な歌を、民俗行事で子どもたちが歌っていたことだ。たとえば東京都大田区羽田では、稲荷の初午祭で、子どもたちが賽銭や新を集めて回るとき、次のように囃した。
「ちんちよ、ちんちよ、こじゅうにおわげ、高い屋根から落っこつて、赤いちんちんすりむいた。言葉銭おくれ」
伝わるうちに原意が不明になった部分があるが、同様な台詞は他地区でも報告され、いずれも囃し始める「ちんちよやまんちよ」と性に關することは意味もわからず囃していたという(大田区史(資料編)民俗)。
山の神の祭りにも性的な囃しとはがなかった。愛知県や岐阜県では二月または二月の七日にヤマノコという山神祭がおこなわれる。この日子ともたちが供物を集め、山神の祠の前で会食し、小屋に泊ま

性のフォークロア

った。その際、岐阜県武儀郡では「やまのこうさんせんほう、山の神様の剃刀はよう切れる剃刀で、大根切りに、菜切りに、馬のちんぽ断ち割って、三里の山へほりあげて、ささきんやわらい」と歌った。また美濃加茂市でも「山の神の剃刀は、よう切れる剃刀で、大根切りに、馬のちんぽ断ち割って、おかかの臍の下へ祭りこんで、ヤハイヤハイと囃した(林魁「美濃国に於ける山の」)。
こちらにもやはり意味不明のところがある。しばしば歌詞にあらわれないことは、山の神の「剃刀」もわかりにくい。が、山の神は女性という伝承を勘案すると、世界各地の神話伝説に登場する「幽の生えた女陰」のことで、野生的な女性原理の象徴ではないだろうか。いずれにしても、性表現は十分読みとれる。
子どもだけではない。かつて日本のい



栃木県・御前岩上の岩姫大明神。木や石の男根を奉納し、子授けや豊稔を祈る

くつかの旧家には、粟穂・神穂二大穂ぶらぶら「あるいは「裸回り」などと呼ばれて風習があった。正月や節分に夫婦が裸で団炉裏のまわりを回り、局部を互いに示しながら「粟穂も神穂もこの通り」割れた、割れた、実入って割れた」などと唱えるのである(飯島吉晴「一目小僧と瓢箪」)。これら性に關することは、所産は、出産力にあやかうとした豊稔儀礼の一要素と解釈されている。たしかに稲荷や山神には豊稔神の側面がある。またその深層には、性によって男・女・上・下、文化・自然といった基本的な区分を攪乱し、日常の秩序を破壊して始原状態を招来しようとする、世界再生の観念も指摘されている。
ひよつとすると例の猥歌には、こうした儀礼ことは断片が含まれていたのかもしれない。もちろん小学生の悪ふざけは、時と場所を定めておこなう家村公認の行事ではなく、豊稔の祈願もあてはまらない。が、それでも、知り合いのあいだを伝わってきた、型をもつリズムミカルな性表現に、秩序を攪乱する効果があるというのは、なんとなく理解していたのである。